

山と、石と、人を愛した八木祥文君を悼む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井出, 志津夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025419

「先を急ぐことはない、山は楽しみながらのぼらにゃ」とあえぐ生徒の荷物を持つ君

山と、石と、人を愛した八木祥文君を悼む

井出 志 津 夫*

入院した4月の頃は、「ストレスがたまってすい臓が膨れてしまった。膨れが引いたら夏休み中家でゆっくり静養して、9月か10月には職場に戻ろうと思うよ」と、すい臓や十二指腸の当たりの図をだして病状の説明をしてくれた。私は、山好きな八木君だから新田次郎の本は大抵読んだだろうが、もしかしたらと「アラスカ物語」を持っていった。八木君はまだ読んでいないと喜んでくれた。そこで、ひとしきり山のこと来年の高校総体のことなどを話した。

20年前、八木君と私は理学部の黒田先生に卒論の指導を受けた。八木君は伊豆稲取の浅間山を、私は石廊崎の南崎火山に挑戦した。互いのフィールドを歩き、地質図作りや顕微鏡下の鉱物鑑定の意見交換をし合った。この時の八木君の顕微鏡スケッチは大変正確で、後に伊東市で作成した「城ヶ崎ガイドブック」に黒田先生が掲載したほどであった。八木君はスケッチが得意で、年賀状は大抵登った山から見たスケッチを送ってくれた。ゼミではティレーの「SOME ASPECTS OF MAGMATIC EVOLUTION」を読みあい、鉱物の晶出順序や液の組成変化に頭を悩ませたものでした。

卒業してからも、八木君は地学会中部支部の運営委員を長く努め、県内の地学案内を始め地学の仲間の結束と普及に、大いにその力を発揮してくれた。本誌「静岡地学」には、『地域性を生かした地学教育について（日本平の生い立ち）—1975・30号—』『地学散歩 皆既月食—1978・37号—』などを始め高校地学部顧問の時の『ポータブル赤道儀の作製—1978・37号—』その他巡検報告等を投稿している。また、県内の巡検だけでなく、小笠原諸島やニュージーランドにも出かけ、地学に対する並々ならぬ意欲を見せていた。

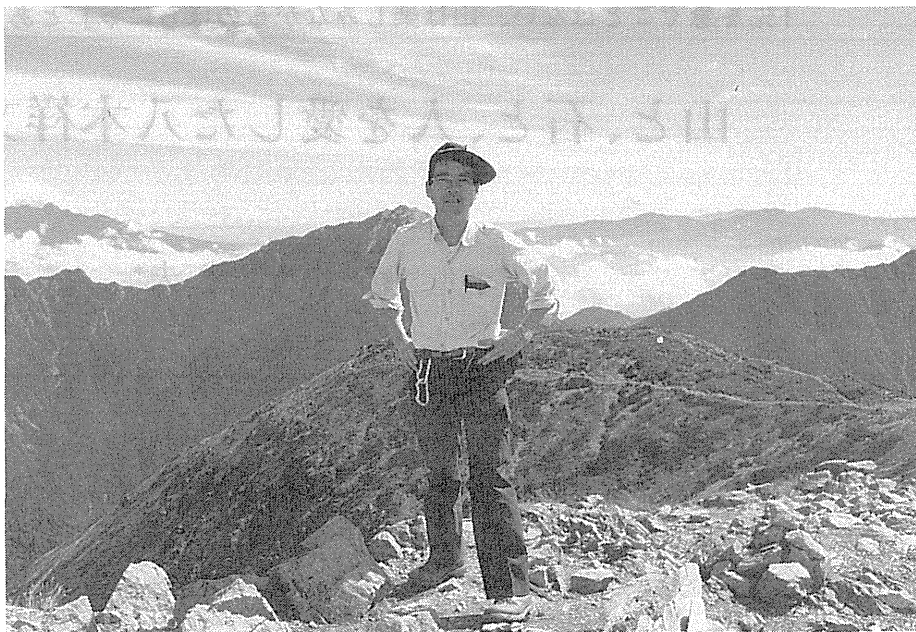
5月に入ってから、胆管がつまってしまうので管を入れて体外に出していた。「この管が取れたら、家に帰れるんだ」と言っていた。食事は流動食で「おかゆを百回くらいかんで食べるんよう。少しでも粒が残っていると腹が痛くなってかなわんわ」と言う八木君の勧めで、私は八木君の食べ残したおかずを食べました。そばにはログハウスの本が置いてあった。「柱を組んで川原に家を組み立てるんだ。意外と安くできるんよう」と候補地を探しているようでした。私もその気になって、梅が島でまだ人に知られていない所を教えたのでした。

一昨年、静大教育理科の同級会は八木君が中心になって、井川県民の森でキャンプをしました。八木君の山専用のワンボックスカーに食料やテントを積み込んで出発。その車は5分も走ると、修理工場に寄らなければなりませんでしたが、その後は何と標高千メートル以上の県民の森まで快適にとばした。山では、子供たちと花火をしたり、星を見たり、テントの中で八木君と私は長考同士の囲碁を

*静岡市立伝馬町小学校

やったりした。家族で来ていた八木君は食事のことで子供がぐずっても頑として受け付けず、泣いても知らん顔をしていた。わがままを押さえながら、協同して自然に溶け込んでいく家族を目指しているようすに、私も父親としての自分を考えさせられた。

6月に入ると、流動食も通らなくなり180mlの野菜ジュースのようなものを「一日かけて飲んでるんだよ」と言って、ストローで一口含んでもぐもぐと飲んでみせた。



ありし日の八木祥文会員

「夕方から夜にかけてすごくつらいんだけど、不思議なもので明け方になると少し楽になるんだよ。それでちょっと眠れるんだ」と。私は、暇つぶしに囲碁でもやろうかと思って行っただのですが、囲碁の道具を出すのはやめなければならなくなった。

7月になると、山やサッカーで鍛えた筋肉はすっかり落ち、骨と皮ばかりになっていた。「もう楽になる時間が無くなっちゃった。いかんわ、一日中吐気がしていらいらしているよ」と、乱れた夏掛けを直しながら言った。そんな八木君を見ると、こんな街のビルの中の病室に寝かせておかないで、川音が聞こえ山に見える自然のまんま中に連れてってやりたいと、私の心は悲痛な叫び声をあげていた。「八木君、気力で頑張れ」と言うと、「ああ、気力だけだ」と言っていた。

7月18日。今までの部屋に名札が無いのでびっくりした。移った個室に入るなり、「八木君、ひどくなったの」と思ったまを口に出してしまった。「大部屋は寝られない。ここは静かだ」とゆっくり言うのでした。私は、ああそうかと妙に納得してしまった。八木君は寝たままでしたが、病院の窓から見えるつもりになって二人で建設中の城北高校を探した。「12月に完成するんだ」と言うので、「それなら12月までゆっくり休んで、出来上がってから行くといいね」と応えた。体を起こして夏掛けを取り、細い細い足を隠そうともせずあぐらをかき大きく息を吸うと、「個室に来て2回もベットから落ちて意識を失ったんだ」とゆっくりゆっくり話した。お腹をくうくういわせながら、吐気をこらえているようでした。7月23日、12時12分、八木君は41歳6カ月の生涯を閉じてしまいました。

今思うと、八木君は嵐の中の岩壁を素手でよじ登るような苦勞をしていました。元気になるという頂上には至りませんでしたが、最後まで登りつづけていました。すごい精神力でした。山岳部の顧問をしていた八木君は、自分の体を生徒に見立てて「止まっちゃいかん、眠ったらだめだ、前へ進むんだ、前へ」と懸命に励ましていたに違いありません。骨と皮と筋になった忌まわしい肉体を脱ぎ捨てた八木君は、今どこに立っているのでしょうか。

八木君は藤枝市立高洲中学、藤枝東高校を経て、静岡大学教育学部に入学、昭和46年4月卒業と同時に清水東高校に赴任し、昭和52年には清水南高校、ついで昭和59年静岡城北高校に移り現在に至っていました。

八木君に最後の別れを告げに行った7月24日、お父さんは「祥文は9年前に手術した折、担当医から再発は絶対に避けなければならないと言われていた」と3人もの子供に先立たれた悲しみをねじふせて、怒ったように私に言われました。9年前に入院した時の、一時の衰弱がみるみる回復していった様子を目の当たりにしている私には、信じられないお話でした。今回も、いくら衰弱しても、八木君は必ず立ち直ると最期まで疑いませんでした。病院の前でばったり遇った奥様の、深い悲しみを浮かべた顔が何を物語っていたのか、今になって判ったのです。

八木君、どうか残された奥さん、陽子さん、達也君、育美ちゃんに、励ましの声を天の頂きから送ってやって下さい。

地学会の会員の皆様と共に、心から八木祥文君の冥福をお祈りいたします。

合 掌